

強者の戦略

【解答例】

紀元前6世紀頃のインドにおいて、バラモン教の伝統にとらわれず独自の思想を展開した思想家たちを自由思想家という。ジャイナ教の開祖ヴァルダマナや仏教の開祖ブッダらが含まれる。彼らは、バラモン教の神の権威に絶対服従する点や祭祀中心主義を批判したことが共通点としてあげられるが、その背景として、商人の社会的勢力が増大し、バラモンの権威が弱まっていたことが考えられる。また、バラモン教が祭祀中心の形式主義に陥り、もはや苦しみからの解放を願う人々の期待に応えられなくなっていると考えたジャイナ教・仏教は、ともに現世の苦悩からの解脱を説いた。ジャイナ教は業に束縛されている現世の靈魂を解放するために苦行の実践と不殺生を重視した。ブッダも最初は断食などの過酷な苦行に励んだが、最終的には快樂主義と苦行の両極端を避け、中道による解脱を説いた。また、ブッダは、悟りに至るための修行方法として八正道を提示した。(395字)

解説

考え方としては以下の順で組み立ててみるとよいでしょう。

- 1.まずバラモン教の特徴をおさえる。
- 2.そのバラモン教に対抗する要素を浮き彫りにする。
- 3.ジャイナ教の特徴を「箇条書き」にしてみる。
- 4.仏教の特徴を「箇条書き」にしてみる。
- 5.3と4の相違点を見出す。
- 6.3と4の共通点を見出す。

おそらくは2.のバラモン教に対抗する要素を考えている時点で6.の仏教とジャイナ教との共通点を割り出すことが可能だと思います。これらはともに同時代に登場した思想であり、バラモン教に対抗するという時点で、必ず共通項目があると決め打ちして臨むとよいでしょう。

また古代インドには「輪廻(転生)」という考え方があります。これはガンジス川の水の循環と人の生死(しょうじ)との関係についてのことになります。つまりは、ガンジス川の水は蒸発し、雲となり、上流部のヒマラヤ山脈にぶつかると雨となってまた地上に降り注ぐ。この循環は命あるものはすべて死からは逃れることができず、死後また別の「生」として生まれ変わるという「生」のサイクルと同じ循環であるとの考えから「輪廻(転生)」という考えがありました。こうした中から、死してもまた生まれ変わることを「苦」と受け止めるようになり、この「苦」からの脱却・解放を願う「解脱」という考えが早くから生まれました。こうしたことをジャイナ教・仏教との共通点として採用すればよいでしょう。

あとはどこまで3.のジャイナ教の特徴を提示するかにかかってきます。というのも4.の仏教の特徴はいくらでも書くことができるとは思いますが、一方のジャイナ教は、仏教ほど詳しくはおさえていないと考えるからです。そこでまず「ジャイナ」という言葉の意味＝「勝利」・「勝利者」という意味を考え、「何に対しての勝利を意味しているのか」＝自分自身に打ち克つ、ということに気づくようにしましょう。この「気づき」を得ることができた時、「自分自身に厳しく向き合う」＝「困難な道のり」＝「苦行」という内容へとつなげてゆくことができ、仏教との相違点(ここでは「中道」)へと広がりを見出すことができるとは思います。

またジャイナ教の中でも比較的守るべき徳目が緩やかな白衣派と、より厳格な裸形派(空衣派)との区別を記すことができる場合は、そのように臨めばよいでしょう。もし仮にこうしたことが思い浮かばないときは、生きとし生けるものすべての命を尊ぶ「アヒンサー」こと「不殺生」を、古代インド思想として共通するものとして取り上げることを控えて、むしろここはジャイナ教の特徴としてカウントする

強者の戦略

ことにより、仏教との字数配分のバランスを保つことは可能となります。

仏教の内容においては、ゴードマ=シッダルダ(のちのブッダ)の生い立ちから論を展開し、人生を苦ととらえたところからの出家(四門出遊)、最初の修行が苦行であること、そののちに苦行では悟ることができないとの考えから中道、そしてその修行方法としての八正道、というように順を追って考えを掘り下げてゆけば正解に近づくことができるはず。 「箇条書き」と提示したのは、項目を漏れることなく整理してもらいたいためですので、実際に記入する際は項目を羅列しただけの「箇条書き」でなくとも構いませんし、むしろ論述ですから、その方がよいと思います。

そして「自由思想家」についてですが、これはインドにおいて紀元前6世紀頃の商工業の発展を背景にしてバラモン教にとらわれない立場としての思想家が誕生することになります。この思想家を「自由思想家」と定義しているだけのことで、さほど悩む必要はないと思います。

最後に「自由思想家」の中でも有力な6人の思想家を仏教側からは六師外道と呼んでいますので簡単に紹介しておくこととします。

1. ヴァルダマーナ

心霊を支配している業に支配されている魂は輪廻を繰り返しているが、そこから抜け出て解脱するため修行を行う。 **ジャイナ教**

2. アジタ=ケーサカンバリン

輪廻を乗り越えるため、霊魂の実体性を認めず、すべては物質に帰るという唯物論を唱えた。

唯物論者

3. パグダ=カッチャーヤナ

アジタ=ケーサカンバリンと同じく物質論者であ

るが、霊魂の実体性を認めた上で、人間は7つの要素の集合体であると考えた。 **七要素論者**

4. マッカリ=ゴースーラ

因果応報を否定し、輪廻は自己の意志によるものではないと主張し、努力による救済の可能性を否定した。 **運命論者(宿命論者)**

5. プーナラ=カッサバ

行為が結果を結ぶことはないとして、因果応報観を否定した。 **道徳否定論者**

6. サンジャヤ=ベーラッティプッタ

人は知によって真理に到達することはできないとし、死後の存在についても答えないという態度をとった。 **懐疑論者(不可知論者)**

いかがでしたか。仏教を仏教だけで、またジャイナ教をジャイナ教単独で考えるのではなく、つなぎ合わせて考える「反バラモン教」の観点からまとめてゆくように心掛けてください。